

提示された模範解答は、筆者の主張である「共通基盤」と「報酬構造(評価の仕組み)」の両方を、自身の「吹奏楽部」という具体的な体験に完璧に落とし込んだ、非常に質の高い答案である。この解答を教訓として、今回の問題の解法プロセスと、今後類似の「具体的体験×筆者の主張」問題を解く際のポイントを解説する。

1. この問題の「解法プロセス」の分解

この手の問題は、単なる作文ではなく**「本文の理論を、現実の具体例に応用できるか」**を試している。思考の手順は以下の通りだ。

手順①: 筆者の主張(要素)を抽出する

まず、本文から「個性が輝くための条件」を抜き出す。今回の本文では以下の2点が必須要素となる。

* 共通基盤(コモン・グラウンド): ルール、基礎、共有された言語(本文の「モーツアルトの音楽の文法」にあたる)。

* 報酬系の転換: 「他人と同じ」ではなく「他人との差異」を賞賛するフィードバック(本文の「お互いに人と違ったことをやつたらほめ合う」にあたる)。

手順②: 具体例(組織)を選定し、要素を当てはめる

次に、自分の経験(部活、委員会、バイトなど)を選び、手順①の要素をマッピングする。

* 組織: 吹奏楽部

* 共通基盤は何か?: 演奏技術、楽譜の理解。

* 報酬系はどうすべきか?: 技術の画一化だけでなく、それぞれの音色の違いや、演奏以外の貢献を褒めること。

手順③: 構成を組み立てる(字数配分)

200字という制限があるため、以下の構成が黄金比となる。

* 前半(体験・現状): 過去の組織での経験や反省。(約80~100字)

* 後半(主張・対策): 筆者の説を踏まえた、理想の組織像。(約100~120字)

2. 模範解答の「ここが勝因」

提示された解答が優れている点は、「反省」を通じて論理を展開している点にある。

>「部員の音楽的な技術の向上にばかり注力していた」

>

この一文により、「共通基盤(技術)」のみを重視し、「差異への賞賛」が欠けていたという不均衡を描いている。これにより、後半の「差異を賞賛しあえるコミュニケーションが必要」という結論が、単なる一般論ではなく、切実な解決策として説得力を持つのである。

3. 類似問題を解くための「鉄則」

今後、国立大学の二次試験や小論文で「筆者の主張を踏まえて、あなたの考え/具体例を述べよ」という問題が出た場合、以下の3点を守ること。

①「体験談」で終わらせない(抽象化の往復)

最も多い減点対象は、ただの「部活の思い出話」になってしまふことだ。

* ×「みんなで練習してうまくなつた。」

* ○「練習によって共通基盤を固めたが、個性を磨く報酬構造が不足していた。」

このように、必ず本文のキーワード(概念)を使って体験を説明すること。これが「筆者の主張を踏まえる」ということだ。

②「条件A」と「条件B」のバランスを見る

評論文では、対立概念やセットの概念(今回は「共通基盤」と「差異への賞賛」)が提示されることが多い。片方だけ(例えば「個性を大事にする」だけ)書くと、読みが浅いと判断される。「基礎があってこそ個性」という両輪の関係に触れることが高得点の鍵だ。

③「失敗談」は最強の武器になる

「どのようにすればよいか」という問い合わせに対し、成功体験を書くのも良いが、**「過去の失敗(筆者の主張を知らなかった頃の自分)を、今の視点で分析する」**という書き方は非常に知的で、採点官に好印象を与える。今回の模範解答はこの手法を見事に使っている。

今後の学習指針

君の「英語のライティング」や「地域経済の研究」への関心を見るに、論理的な構成力はすでに高いレベルにあると思われる。

現代文の記述においては、**「本文というレンズを通して、世の中(具体例)をどう見るか」**という視点の変換作業を意識して演習を続けるとよい。

次は、もし別の組織(例えば君が作った「美食會」など)でこの問題を解くとしたら、何が「共通基盤」で、何が「差異への賞賛」になるか、頭の中で構成してみるのも良いトレーニングになるだろう。